研究調査報告

世界遺産保護における住民による主体的活動の重要性について

高　倉　健　一
TAKAKURA Kenichi

はじめに

近年，世界遺産を取り上げたテレビ番組や世界遺産検定などが人気となっていて，旅行代理店の店頭を見ると必ずと言ってよいほど世界遺産観光に関する旅行企画のパンフレットが置いてある．

世界遺産（World Heritage）とは，国際連合の専門機関であるユネスコ（UNESCO）の1972年の総会で採択された世界遺産条約に基づいて世界遺産リストに登録された建造物や自然などの顕著な普遍的価値を持つ不動産のことであり，その数は2009年7月現在で文化遺産689件，自然遺産176件，複合遺産25件の計890件にのぼる[(1)]．世界遺産に登録された地域では，そのほとんどの地域で世界遺産を観光資源として利用する観光開発が進められていて，毎年多くの観光客が訪れるなど観光業を中心とした経済発展を見ることができる．このように世界遺産は観光開発における強力なツールであり，現在，世界各地で世界遺産登録を獲得するための運動が行われている．

世界遺産登録物件の中には，「歴史地区・旧市街・都市・古都」の名称がつく登録物件など人が住む地域の中に世界遺産の登録物件が存在している，あるいは現在も人が生活している建造物を含めた市街地全体が登録対象となっている物件がある．例えば東アジア地域では今回の論文で調査事例として紹介している日本の白川郷・五箇山の合掌造り集落や中国雲南省の麗江古城などがこれに該当する．

これらの地域でも世界遺産登録物件を資源とした観光開発が行われているが，元々人が住んでいる地域が世界遺産に登録されているため観光客の行動範囲がそのまま住民の生活範囲と重なっていて，騒音問題やプライバシーの侵害など住民生活への悪影響が起こりやすくなっている．また，観光開発によってもたらされる利益の多くが外部から来た商売人や外部で生産された土産物の生産業者に獲得されていて，現地住民にはその利益があまり届かないなどの経済的な問題も起きている．さらに，登録地域内にある宿泊施設や商店などに利用している建物はそれ自体が世界遺産登録物件であることが多いが，法律が整備される以前から商売人によって商業利用されている建造物では本来の形態とは違うものへと改造されてしまっている事例もあり，問題となっている．

筆者は，世界遺産登録による恩恵はそこに住む住民が第一に受け取るべきであり，そのためには住民が世界遺産に登録された自分たちの文化を保護・活用していきたいという意志を持って活動できるようにすることが必要と考えている．しかし現実では，例えばある物件が世界遺産に登録されると「文化遺産保護の専門家」が保存計画を立て，「経済・経営の専門家」が観光誘致計画を立てるが，そ

の際に最も重要なはずの今そこに住む人々の生活や意識に対する観点が欠落したまま話が進んでしまっているのが現状であり[(2)]，一見すると当たり前と思われる「住民が第一であるべき」という考えは実現が難しい理想論のようになってしまっているのである．筆者は，この状況を改善するためには「文化遺産保護の専門家」や「経済・経営の専門家」のように「住民の生活や意識をサポートする専門家」として住民の側に立った研究者が世界遺産活用の計画を立てる際に住民が自らの意思で世界遺産の利用や保護活動を行うことができるような計画を立てられるように活動することが必要と考えている．

今回の論文では，この考えを今後展開していくためのひとつの研究事例として，富山県五箇山の相倉合掌造り集落および中国雲南省の麗江古城で行った聞き取り調査の結果と関連する文献資料をもとにして，世界遺産物件の活用や保護における住民の主体的活動の度合いが世界遺産登録物件に与える影響について考察する．そして，両地域の調査結果を比較することで世界遺産登録物件保護の観点からも住民の主体的活動を重要視する必要があることを論じるのが本論の目的である．なお，本論中の図表や写真で注釈がないものは筆者が作成・撮影したものである．

関連する先行研究の紹介

世界遺産に関する研究は，これまでに経済学や法学，建築学や文化財保存学などさまざまな研究分野において行われていて，「CiNii」等の文献検索サイトで検索すると数多くの研究書を見つけることができる．世界遺産に関する書籍を多く発行しているシンクタンクせとうち総合研究機構によれば，ユネスコの世界遺産はきわめて学際的で博物学的なもので，自然学，地理学，地形学，地質学，生物学，生態学，人類学，考古学，歴史学，民族学，民俗学，宗教学，言語学，都市学，建築学，芸術学，国際学など地球と人類の進化の過程を学ぶ総合学問であるのだという[(3)]．

しかし，本論と関係の深い，世界遺産の活用と保護を論じるにあたってそこに住む人々の暮らしや考えを重要視して論じている研究者や研究書はまだ少ない．その中のいくつかを紹介すると，例えば山村高淑は，本論の調査地でもある麗江古城にてこれまでに世界遺産を観光資源とした観光産業の実態や世界遺産都市の保護制度に関する調査を行っている研究者で，2007 年に出版された『世界遺産と地域振興 ── 中国雲南省・麗江にくらす』の中で，地域住民の生活空間そのものが世界遺産登録されている場合において，世界遺産を観光資源として活用する場合の第一の受益者は住民でなければいけないこと，住民の生活の質の向上を考えて開発を行うことで観光客にとっても滞在しやすい環境になるという思考の順番が大事なこと，これらを実現させるためには地域社会が自らの意思に基づいて観光活動をコントロールし，かつ観光活動に振り回されることのないよう振る舞う能力を具えることが決定的要件であることを述べている．また，研究者は地域社会が観光開発に対して自律的な態度を発揮するためにはどのような仕組みが有効なのかを模索することが重要であると述べている[(4)]．

同じく麗江古城を研究対象として世界遺産登録と観光地化について研究している藤木庸介は同書の中で，世界遺産登録以降，商売人や観光客が急激に流入してくるとともに，それまでの住民が静かで現代的な暮らしができる新市街地へと転出していることで，コミュニティが機能しなくなってきていることが問題と指摘している[(5)]．また，別の著書においては麗江古城内の居住文化の変化について取り

上げ，民家が飲食店やゲストハウスに過度に改築されてかつての居住文化の様相がなくなってきていることを問題視しながらも，世界遺産登録以前からの住人がこれまで住んできた建物をゲストハウスに改築して自ら経営しながらインフラ整備がなされたその建物に住み続けている事例を挙げて，このような住民の意思に基づいてもたらされた居住文化の変容は住民のニーズに沿ったものであり，従前からの住民が外部へ離れていくよりは良いと述べている[(6)]．

また，才津祐美子は白川村の合掌造り集落にて景観の保全という概念から調査を行い，世界遺産登録による観光客の増加によって観光業（土産物屋・飲食店・駐車場）を営む人が増加して土産物屋が林立し休耕田が目立つようになるなど景観が悪化している問題や，住民の話し合いによって歴史的風致を維持するために周囲の調和に合わせて修正を行う「修景」によって白川村の景観は日々の生活の中で再創造されていると述べている[(7)]．しかし別の論文の中で，斎藤英俊らの研究報告によってこの「修景」行為が世界遺産の価値を阻害する景観要素とされたうえ，それがその後の住民の意見を無視した規制法の制定につながったために住民が当惑し憤りを表した調査事例を挙げ，現地に暮らす人々の生活に直結していることをあまりにも軽視しているように見えると指摘するとともに，世界遺産に登録されたことでさまざまな人や機関が関与してくる状況の中で直接の担い手である住民が主導権を握り続けられるかどうかは自身にかかっているし，世界遺産をどう守っていくのかを決めるのはそこに住む人々自身だと述べている[(8)]．

彼らの研究対象や研究視点には多少の違いがあるが，そこに住む人々の生活を大切に考えるとともに住民の意志によって物事が決定されることが重要だとする考え方は共通していると言える．しかし，このような考えを持って世界遺産の研究を行う研究者はまだ少なく，前述した斎藤らの研究のような登録物件の文化保存を優先する研究が多いのが現状である．

五箇山相倉地区合掌造り集落の調査事例

では次からは，2009 年 7 月に行った富山県五箇山の相倉合掌造り集落での調査事例および 2009 年 7 月下旬から 8 月上旬にかけて行った中国雲南省の麗江古城での調査事例を紹介して，人が住む世界遺産登録地域での登録物件の活用や保護における住民の主体的活動の度合いが世界遺産登録物件に与える影響について考察していく．

最初に，富山県五箇山の相倉合掌造り集落での調査事例について紹介する．

富山県五箇山の相倉合掌造り集落は，同じ五箇山の菅沼地区にある合掌造り集落と岐阜県大野郡白川村の萩町地区とともに「白川郷・五箇山の合掌造り集落」（図 1）として 1995 年 12 月 9 日に世界文化遺産に登録された．相倉地区と菅沼地区は世界遺産に登録される前年の 1994 年に，白川村萩町地区は 1976 年にそれぞれ国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された．また，相倉地区と菅沼地区は 1970 年から国の史跡にも指定されている．

相倉地区は，世界遺産登録時は富山県東砺波郡平村の集落のひとつであったが，2004 年の市町村合併によって菅沼地区のある上平村とともに現在の南砺市となった．ちなみに五箇山という名称は平村と上平村，利賀村の三村を合わせた地域の総称である．この地域は日本でも有数の豪雪地帯の山間地であり，冬には 2 メートル以上の積雪となることがある．世界遺産登録物件である合掌造りの家屋

図１　合掌造り集落の位置

写真１　合掌造り

（写真 1）は屋根が急勾配になっていて，これには雪が地面に滑り落ちることで豪雪に耐えるようにするためと，屋根が急勾配なことで生まれた屋根裏の空間（写真 2）を生かして養蚕をすることで積雪によって外での仕事ができない季節でも仕事場を確保するためという二つの理由があり，この地方の厳しい自然環境への適応を表した形状となっている．また，合掌造りの屋根は葺き替え作業が必要な茅葺き屋根（写真 3）であり，そこからは「結（ユイ）」と呼ばれる代々続いてきた住民の相互扶助風習を見ることができる．これらのことが世界遺産への登録審査の際に高く評価され，世界文化遺産に登録された．白川郷・五箇山合掌造り集落の世界遺産登録基準は，後述する中国雲南省の麗江古城の登録基準中にもある文化遺産ⅳ，ⅴ[(9)]であり，麗江古城と同じく人が現在も住む建物を含めた地域が世界遺産の登録対象となっている事例である．

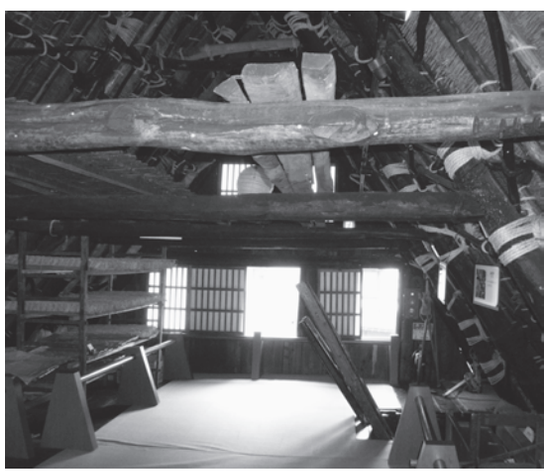

写真２　合掌造りの屋根裏

写真３　茅葺き屋根

白川郷・五箇山の合掌造り集落では世界遺産登録によって観光客が増加[(10)]し，例えば萩町地区では，それまで農業をしていた住民が建物を増改築して土産物屋や飲食店，駐車場などの観光業を営む事例が増加した．この産業の変化から休耕地や駐車場が増加して景観が悪くなったとの指摘も受けている[(11)]という．住民組織について見ると，萩町地区では 1971 年に同地区の全世帯が会員である「白川郷萩町部落の自然環境を守る会」（以下「守る会」と記す）が発足し，住民が話し合いをしながら自分た

ちの意思に基づいた合掌造りの保存活動を進めてきた．しかし，世界遺産登録に伴って多くの研究者が調査・研究をするために訪れるようになり，その研究成果によって住民の意思や生活よりも世界遺産に登録された地区の景観保護を優先するような規制強化が住民の理解を得ないまま決定されてしまうようになった．また，1997 年に「財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団」が設立され，守る会に活動費を助成するとともに，住民による住民のための審議の場でもあった守る会の審議に職員を派遣して参加するようになった[(12)]．その結果，世界遺産への登録以降，それまでの住民の話し合いに基づいた住民の主体的活動が制限を受けるようになり，合掌造りの保護活動への住民の主体性が小さくなってしまった．

しかし，今回筆者が調査を行った相倉地区では萩町地区のような状況は起きていない．

相倉地区は先述したように 1970 年に国の史跡指定を受けたという経緯を持っていて，元村長の Z さんの話によると，史跡指定登録の際に登録対象である建造物等の保存に関する方向性や法による規制の生活への影響などについて当時の住民全員で十分に話し合ったうえで史跡指定を決定したという経緯があり，そのおかげで住民の同意のもとでこれまで史跡に関する法律によって史跡指定物件が保護されてきたという．史跡に関する法律は，例えば自分の家の敷地内の石垣修繕にも手続きが必要となるなど生活に大きな影響を与える厳しい内容ではあるが，そのことについても住民で話し合って決定していたためこれまで大きな反発はなかったという．また，住民全体で話し合って地区内での民宿経営を進めるなど，史跡による保護の中で住民の意思に基づいた観光開発が行われてきた．相倉地区では世界遺産に登録された後も上記のような住民の主体的活動が保たれていて，萩町地区のような不満を感じるような保護政策が行われることはなく，また観光客とも良い関係が保てているのだという．

萩町地区と相倉地区の事例は，住民が自分たちの意思によって主体的に保護活動や観光開発を行うことで住民自身が自分たちの文化である世界遺産に対して誇りを持って守り継承していく意識を持つことができることを表している．また，保護のための厳しい法規制も住民が事前に話し合って自らの意思で決定することで生活において不便なことがあっても受け入れることができるのであり，住民の意思や同意がなく決定されたものは受け入れにくく反発が起きやすいことを表している．

例えば，萩町地区ではある話し合いの際に住民から「みんなが幸せにいきていけるなら，合掌造りなんてなくなってもええと思っている」という意見が出たという．これについて才津は，世界遺産であろうとそれを守るか守らないか，あるいはそれをどう守っていくのかを決めるのは萩町地区の人々自身なのではないかと述べている[(13)]．これはつまり，保護に関して住民が自らの意思によってどうするかを決定し，活動できることが重要だということを述べているのであり，この住民の意見は保護活動に関する住民の主体性がなくなり，さらに自分たちの意思とは違うものによって世界遺産保護のための規制強化がなされて生活への制約を受けていることに対する住民の憤りの気持ちの表れなのだと考えられる．

また観光開発についても，先述したように相倉地区では住民全体で話し合って地区内での民宿等の観光業の経営を進めてきたことや，史跡指定による規制のおかけで，萩町地区のように土産物屋や駐車場がたくさんできて景観を損なうというレベルまで観光開発が進むということは起きていない．ただこれに関しては，萩町地区は名古屋方面からの高速道路が先に開通していたため中京圏や関西圏な

ど大都市からのアクセスが良かった（五箇山方面へは2008年になってから開通した）という交通網の状況や，萩町地区（写真4）の戸数が147戸（1995年[14]）なのに対して相倉地区（写真5）では27戸（1994年[15]）と地区の規模に差があることも影響していると思われる．しかし，そのことを差し引いても，住民全員で話し合って受け入れを決定した史跡指定による規制や，民宿経営の際に全戸で話し合ってどの家が経営するかを決定してきたことなど，相倉地区の住民の主体的活動が景観を保全してきたという現実に与えてきた影響は大きいと言える．

写真4　萩町地区合掌造り集落[16]

写真5　相倉地区合掌造り集落

ここまでに紹介した白川郷・五箇山の合掌造り集落の事例からは，住民によるコミュニティが存在し，そこでの話し合いに基づいた住民の主体的な活動が行える状況であることが世界遺産登録物件の保護においても良い影響を与えるということを読み取ることができる．ここで言うコミュニティとは，先述した世界遺産登録の評価対象となった「結」のシステムに表わされるような，その地区に住む人々が共同体意識を持って相互協力しながら生活している住民組織のことである．このコミュニティが存在することで住民同士の意思疎通や話し合いを円滑に行うことができ，住民が自分たちの意志に基づいて活動することができるのであり，例えば白川郷の事例のように外部からの力によってこの活動が制限される場合には，住民の世界遺産登録物件に対する保護意識の低下を招いて保護活動に影響が出ることにつながってしまうのである．また，世界遺産に関する規制等が住民生活に及ぼす影響についても，住民が自分たちの意思によって受け入れを決定していることでその影響や反発を少なくすることができ，結果住民の生活に対する不満も少なくなることが事例からは見えてくる．そしてこれと逆の場合，すなわち住民の意思による受け入れではない場合は不満が出やすいことが事例からうかがえるのである．

それでは次に，同じく人が居住する地域が世界遺産登録されている中国雲南省の麗江古城の調査事例を紹介して，過度に観光開発が進んだことで住民のコミュニティが成立できなくなっている事例について見ていくことにする．

中国雲南省麗江古城の調査事例

最初に，中国雲南省の麗江古城の概要について紹介する．

麗江古城（写真 6）は，中国雲南省麗江市古城区にある旧市街区のことである[17]．雲南省の省都である昆明から北西の方角に約 600 キロメートル離れた，周囲を 4000 m 級の高い山々に囲まれた盆地に位置している（図 2）．この盆地は一番低い場所でも標高約 2400 メートルという高地にありながら，盆地という地形と北緯約 25 度という低緯度に位置するおかげで年間平均気温が 12.6℃ と夏は涼しく冬は暖かい気候となっている．また低緯度に位置するため雨季と乾季があり，年間総雨量約 1000 mm の約 85% が雨季にあたる 5〜10 月のうちの 7〜8 月に集中して雨が降るため，年間を通してみると晴れの日が多い．しかし周囲にある 5000 メートル級の高い山々から麗江古城の北側にある黒竜潭に湧き水が乾季でも涸れることなく湧き出していて，そこから麗江古城の中へと川が流れているおかげで麗江古城は温暖な気候と水に恵まれた都市となっている．

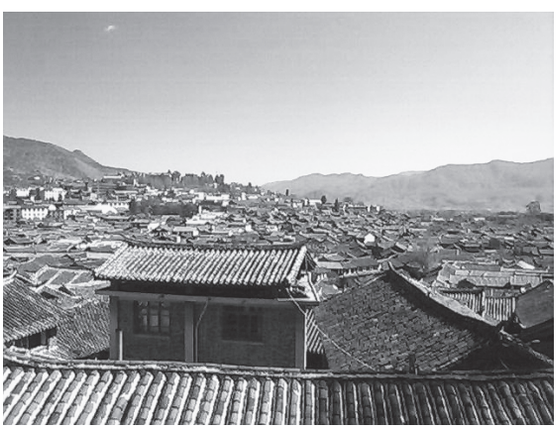

写真 6　麗江古城

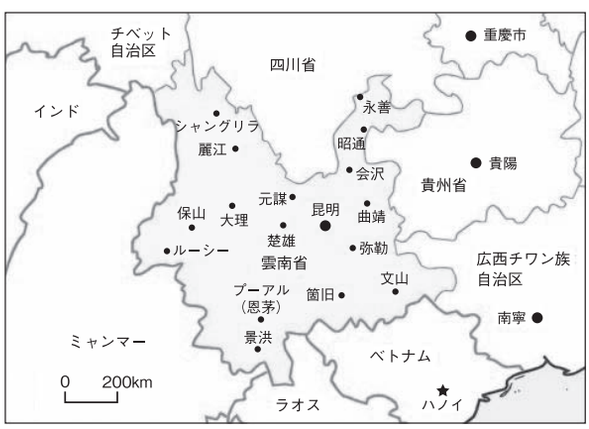

図 2　雲南省地図

麗江古城は約 800 年の歴史を持つ都市で，茶馬古道と呼ばれる四川からチベットへと続く交易路の重要中継地として栄えてきた．また，元代から清朝初めごろまで土司として麗江を治めていた少数民族納西族の首長であった木氏が麗江古城に木府を置いて政治を行っていたことや，それ以降現代においてもこの麗江古城がある麗江納西族自治県に納西族総人口の約 70% が集住していることからもわかるように，麗江古城は納西族の中心都市として存続してきた．ただし交易の重要中継地である麗江古城には他民族も生活していたことから納西族のみが麗江古城の住民を構成する要素ではないことを理解する必要がある．

この長い歴史の中で，茶馬古道の交易による交流などよって漢族やチベット族など周辺諸民族の文化を吸収・融合しながら独自の文化が築かれてきて，その文化の影響を受けて造られてきた家屋や街並みが 1997 年に世界文化遺産に登録された（登録基準は文化遺産 ii，iv，v）[18]．以後急激に観光開発が進んで経済は大きく発展した[19]が，観光客の増加などによって古城内の生活環境が悪化したために以前からの住民が隣接する新市街（1980 年代から造営された都市）など他地域へ流出し，代わって外部から商売を目的とした人々が多数流入し，商売のために民居を飲食店や宿泊施設に改築しているという問題が発生している．

この問題に対して，麗江市政府もいくつかの対策を取っていて，例えば 2004 年 1 月から旧住民を

麗江古城に呼び戻して住み続けてもらう政策としての「恵民政策」を開始し，2005年12月より旅館・カフェやバー・レストランの三業種について新規の営業許可証を発行しないという政策をとっている．しかし，「恵民政策」では戻ってきた住民一人につき毎月10元（約140円，2009年7月時の通貨レートで換算）が給付されるだけなのに対し，商売人に建物を賃貸した場合は毎月数百元〜数千元の家賃収入となるため，この政策は実効性が弱く大きな成果を挙げられていないのが現状であるという．(20)

また，世界遺産である家屋や街並みを守るための法整備についてみると，例えば1997年に施行された「麗江大研古城保護詳細規劃」では「外観は原状復元を目指すが，建築内部は現代生活の要求を満たすよう改造を進めることができる」としている．そのため，住民は室内を現代様式にして生活の便宜性を向上させたり（写真7），世界遺産登録以前に建てられたコンクリート造りの現代様式の建物でも，屋根の上に新しく瓦屋根を増築することで規劃に則した街並み景観を保護する形式となり継続して住むことができている（写真8）など，麗江古城の街並み景観を守りながらも住民の生活環境の保護・向上を目指せるようになっている．

これは，規劃の中で「建築外観の保護と住民による合理的かつ現代的な建築の利用を結合してこそ，旧市街区のより良い保全につながり，持続可能な発展を実現できる」と明記されていることから

写真7　息子夫婦のために現代様式に改装した部屋

写真8　コンクリート造りの建物と景観を保護するためにその屋上に設置された瓦屋根

もわかるように，この規劃が旧市街区の住民の生活向上を可能にして旧市街区に住みやすくすることで世界遺産登録物件の持続可能な発展を目指すものだからである．筆者が 2004 年に聞き取り調査を行った際に写真 7 の住人に話を聞いたときにも，「内装を現代様式にリフォームして便利な生活ができたおかげで若い息子夫婦と孫が外の新市街区に引っ越さずに一緒に住んでくれているのでうれしい」という話を聞くことができた．このことから，この規劃が住民の生活環境向上や他地域への流出を防止する一定の効果をあげていることがわかる．

しかし，この規劃を利用して多くの民居が内装や中庭などを大幅に改造してゲストハウスやレストランなどの店舗として利用されているという問題が起きていて，またそれらの店舗の経営者の多くが外部から商売をするために流入してきた人々であるという[(21)]．これは，この法律自体は先述した事例のように住民の生活向上にも役立っているが，「恵民政策」等の住民保護と商売人の流入抑止の政策がうまく機能していないために商売人が多く流入してきて，その商売人が建物の保護よりも商売を優先して上記規劃を利用してしまっていることで起きている問題である．また，先述した 2005 年 12 月より施行されている旅館・カフェやバー・レストランの三業種について新規の営業許可証を発行しないという政策も，藤木の調査によると政策施行後にも古城内のいくつもの場所で新たな営業がなされているのを確認していて，執行状況や効果については未確認の部分が多いという[(22)]．

これら民居の改築と外部からの商人の流入に関して，筆者は 2009 年に麗江古城へ調査に行き，古城内の何軒かのゲストハウスに泊まって内装の改築の様子やそこで働く従業員への聞き取り調査を行った．

1 軒目に紹介するゲストハウスは麗江古城へ訪れた初日の夕方に麗江古城内の路地で客引きをしていたそこの従業員に声をかけられたことがきっかけで宿泊を決めたところで，今回泊まった中では一番建物の規模が小さいゲストハウスである．

このゲストハウスは四方街に近い路地の奥まった所に位置していて，宿泊客用の各部屋内は壁板が見た目の綺麗な板に交換されてトイレとシャワーの部屋が設置され（写真 9），厦子（建物の各棟と中庭の間にある半屋外の廊下のようなスペース）に洗濯機や冷蔵庫，パソコンデスクが置かれているほかは大きな改築はされていなかった（写真 10）．このゲストハウスのオーナーは四川省から来た 40

写真 9　宿泊客用の部屋とシャワールーム（1 軒目）

写真 10　厦子に置かれたパソコンや洗濯機

代の漢族の女性で，5人の従業員のうち3人が納西族とのことであった．最初に声をかけてくれた従業員も納西族で，彼女は以前は家族で古城内に住んでいたが，現在は新市街に引っ越して住んでいるとのことであった．また，彼女には姉がいて，姉も古城内の別のゲストハウスで従業員として働いているのだという．

2軒目のゲストハウスは古城内の南側入口にある駐車場の近くにあり，中国国内のインターネットの宿泊予約サイトで探して宿泊予約をとってから訪れた．

1軒目の建物と比べると建物の規模が大きく，中庭に階段が設置されて植物が数多く置かれ，厦子もきれいに整備されていたほか，中庭の上部に透明な屋根が設置されていて雨が降っても濡れないようになっているなど，かなり手を加えた改築がなされていた（写真 11）．宿泊客用の部屋も壁や床，天井などの内装が都市部にあるコンクリート造りのホテルのようにきれいに改装されていて，部屋の中にいると四合院の部屋の中にいるとは思えないほどであった．またシャワールームもしっかりとした造りになっていた（写真 12）．フロント係をしていた二人の 20 代女性の従業員にどこの出身かを訪ねたところ，二人とも四川省から働きに来たとのことで，他の従業員も四川省から来た人が多く，

写真 11　綺麗に整備された厦子と上部に透明な屋根が設置されている中庭

写真 12　宿泊客用の部屋とシャワールーム（2 軒目）

ここで働く従業員は建物の 2 階の上にある屋根裏を改造した部屋に住み込みをして働いているとのことであった．

3 軒目のゲストハウスは麗江古城の北側に位置する水車のある古城入口の近くにあるゲストハウスで，ここも 2 軒目のゲストハウスを予約したインターネットの宿泊予約サイトで探して予約してから訪れた．

ここの建物は四合院造りの建物が二つ連結されたような形式の建物で，中庭が二つもあるかなり規模の大きな建物であった．また各房の壁が道路に面した外側だけではなく中庭に面した壁を含めたほとんどの壁が白いコンクリート壁で造られていて，これまで見慣れていた木造の四合院とは少し違った印象を受けた（写真 13）．部屋の中は 2 軒目のゲストハウスと同じく都市にあるホテルのようなきれいな内装へと改装されていて，シャワールームも同じくしっかりとした造りになっていた（写真 14）．このゲストハウスのフロント係をやっていた 20 代の男性従業員にどこの出身かと話を聞いたところ，2 軒目のゲストハウスの時と同じく四川省から働きに来ているとのことであった．

これらの調査結果からわかったことは，まず麗江古城内にあるゲストハウスでは，部屋の内装をき

写真 13　厦子と二つある中庭（3 軒目）

写真 14　宿泊客用の部屋とシャワールーム（3 軒目）

れいにしたり部屋にシャワールームを設置するなどの室内の改装が行われているほか，中庭に階段を設置したり中庭に面した壁をコンクリートで造るなど，室内以外の部分にまで従来から麗江古城で見られた伝統的な建物とは違う形式に改築されている事例があることを実際に確認することができた．これらは「麗江大研古城保護詳細規劃」にある「外観は原状復元を目指すが，建築内部は現代生活の要求を満たすよう改造を進めることができる」という部分を過大解釈あるいはその範囲を超えたものであり，ゲストハウス経営の場においては世界遺産の保護よりも観光客向けの商売のほうが優先されてしまっていることを表している．

また，従業員への聞き取り調査の結果についてみると，まず 2 軒目と 3 軒目のゲストハウスのフロント係からは「四川省から働きに来ている」という話を聞くことができた．四川省は麗江古城のある雲南省の北側に隣接する省であり，麗江古城は雲南省内では北側に位置していて四川省とは地理的に近いことから四川省から観光開発が進んだ麗江に働きに来る人は多いのではないかと考え，3 軒目の男性従業員にこの疑問について質問してみた．すると，男性従業員の話では「自分の知り合いの中でも麗江古城に四川省から働きに来ている人は多く，友人らから聞いた話も入れて考えると四川省から麗江に働きに来ている人はオーナーとしても従業員としても割と多いと思う」とのことであった．

このことについて，1 軒目のゲストハウスで知り合った納西族の従業員とその友人達（納西族）と会って話をする機会があった時に質問をしてみたところ，やはり「四川省から麗江古城に働きに来ている人は多いと聞いたことがある」との答えを聞くことができた．また，その時一緒に来ていた，同じく現在家族で新市街に住んでいて古城内で働いている友人の話では，「四川省から出稼ぎに来ている人たちは漢族が多く，彼らはマナーがあまり良くないという話を納西族の友人達から聞くことが多い」とのことで，今回話を聞かせてくれた彼女ら自身もそのように感じる時がよくあるとのことであった．さらに，納西族の若者の中では麗江古城へ外部から来ている商売人に対してあまり良いイメージを持っていない人が多いそうで，その理由は外部から来ている経営者は時に月数万元稼いでいる場合もあるのに比べて自分達従業員は給料が安い（彼女らの給料は月 800 元～1000 元程度）ことによる不満があるからだという．

この聞き取り調査からは，現在麗江古城に経営者や従業員として働きに来ている人々は地理的に近

い四川省から来ている漢族が多く，その彼らと元々麗江に住んでいる納西族の若者たちの間には必ずしもうまくコミュニケーションが取れているわけではない事例があることがわかった．これまでの先行研究でも，例えば藤木らの調査による麗江古城内の店舗経営者の人口構成表（表1）[23]のように暫定居住許可証（本来の戸籍地からはなれて居住する際に発行される許可証）などの戸籍統計資料を利用した流入人口数やその民族構成の研究は見ることができたが，今回の聞き取り調査のように麗江古城で働いている納西族が外部から働きに来ている人々に対する気持ちを直接聞いて研究する試みはほとんど見ることがない．今回紹介した調査事例はまだまだ少数であるため，今後は聞き取り人数や聞き取り内容を増やして資料としての価値を上げていきたいと考えている．

表1　古城内の店舗経営者の人口構成表

				2000年6月		2004年8月	
				小　計	合　計	小　計	合　計
店舗経営者主体区分	個人経営者	常住人口	ナシ族	123（43.0%）	139（48.6%）	107（31.8%）	112（33.3%）
			漢　族	13　（4.5%）		1　（0.3%）	
			その他	3　（1.0%）		4　（1.2%）	
		流入人口	漢　族	101（35.3%）	124（43.4%）	130（38.7%）	196（58.3%）
			ペー族	12　（4.2%）		55（16.4%）	
			ナシ族	1　（0.3%）		1　（0.3%）	
			その他	10　（3.5%）		10　（3.0%）	
	企　業			20　（7.0%）		4　（1.2%）	
	不　明			3　（1.0%）		24　（7.1%）	
合　計				286（100%）		336（100%）	

また，ゲストハウスなどの麗江古城内の店舗で働く従業員に四川省から住み込みで働きに来ている人がいることや，以前に麗江古城内に住んでいて現在は新市街に引っ越している人たちの中にも古城内で従業員として働いている人たちがいるという事例を確認することができた．今回の調査では四川省から来た人を含めた外部から麗江古城に働きに来ている人数について統計を取ったわけではないためその正確な数については言えないが，藤木らの調査によって世界遺産登録以降に店舗経営者として外部から来ている人が増加していることが明らかにされている[24]ことや，ゲストハウスに住み込みで働ける環境があること，今回聞き取り調査をした従業員の話の内容や彼らの中にも納西族以外の外部から来た人が複数いたことなどを総合すると，麗江古城の店舗で働いている人たちの中にも外部から来た人たちが多くいると推測することができる．この推測と，先述したように以前からの住民が新市街地へと転出している状況があることをあわせて考えると，麗江古城では世界遺産登録後の急激な観光開発によって住民の入れ替えが起きているためにこれまで麗江古城で生活してきた住民によるコミュニティが機能しにくくなってきている，あるいはもう機能しなくなっているという状況が起きていて，そのことが世界遺産登録物件の保護にとっても問題をもたらしていると推測することができる．それは例えば，麗江古城内の井戸や川の水の利用方法においてそれまで存在していた時間帯や場所で飲料水・炊事・洗濯と利用方法を区別してきた住民同士による生活のルールが，新しく麗江古城に来た人々には伝わらない，またはその大切さを理解されないなどの理由で守られなくなってきていることや，旧来からの住民が自分達の生活の利便性の向上のために内装等を改造するにとどめて民居に見られる自文化を保っているのに対し，商売人は民居の文化の保護を意識することなく商業目的優先で改造してしまっていることからも見ることができる．このような状況については山村も問題であると指摘していて，さらにこれまでの歴史をみても麗江古城には茶馬古道の重要交易地として納西族以外の民族も多く住んでいたことから，他地域から納西族以外の他民族が流入すること自体は大きな問題ではなく，その流入や住民の入れ替わりが急激に行われていることでコミュニティが形成できないと

いうことが問題なのであると指摘している[25].

筆者は合掌造り集落の調査報告の中で，住民によるコミュニティが存在し，そこでの話し合いに基づいた住民による主体的な活動ができることで世界遺産登録物件の保護に良い影響を与え，住民の生活に対する不満も少なくなると考えられると述べた．この観点から考えると，麗江古城でも住民によるコミュニティを回復させて住民が主体的活動を行えるようにすることができれば，それは世界遺産の保護にとっても良い方向に働くと考えることができる．現在麗江古城で起きている世界遺産保護に関する問題は，住民が生活環境への不満から新市街へと流出して空き家ができ，そこを外部から来た商売人が商売優先で改築していることと，これまで住民の間では守られてきた麗江古城内のルールや文化が新しく流入してきた人々にはその大切さが伝わらなくて守られなくなっていることで起きている．つまり，住民によるコミュニティが回復して自らの文化を保護する活動ができるようになること，また外部から来た商売人にも麗江古城に関わる住民としての意識を持ってもらうようにすることができれば，これらの問題が解決に向かう可能性があると考えられるのである．

しかし，先述した「恵民政策」の効果不足をみてもわかるように，現在の麗江古城で住民によるコミュニティを回復させることは現状ではかなり難しい．これを実現させるためにはコミュニティの存在とそれがもたらす住民の主体的活動の重要性にもっと目を向けた法整備が必要であると考える．

おわりに

これまで，富山県五箇山の相倉合掌造り集落と中国雲南省の麗江古城で行った調査結果と関連する文献資料をもとにして，住民によるコミュニティの存在とその主体的活動が世界遺産登録物件に与える影響について考察してきた．相倉合掌造り集落の事例では，史跡指定や民宿経営の決定の際に住民全員で話し合って決定してきたことを紹介し，住民によるコミュニティでの話し合いに基づいた主体的な活動ができることで世界遺産登録物件の保護に良い影響を与え，住民の生活に対する不満も少なくなると考えられることを述べた．また同じ合掌造り集落で世界遺産登録されている萩町地区では，世界遺産登録以降に外部からの研究者の研究成果によって住民の意思や同意がないまま決定された法規制に対して反発が起きていることを紹介した．中国雲南省の麗江古城での事例では，世界遺産登録後に急激に観光開発が進んだことで商人が流入するとともに住民が流出してしまってコミュニティの機能に問題が起きていて，そのことによって世界遺産の保護に影響が出ていることを指摘した．また合掌造り集落の調査事例から麗江古城でも住民によるコミュニティを回復させることができれば世界遺産の保護にとって良い方向に働くことができるとの考えを紹介したが，現在の麗江ではかなり難しいことであり，これを実現させるためには住民の主体的活動の重要性にもっと目を向けた法整備が必要であるという考えを述べた．

今回，住民による主体的活動が実現できていると考えられる相倉地区の事例を紹介し，それを比較材料として用いることで麗江古城における住民によるコミュニティが機能していないことによる問題点を指摘することができた．しかし相倉地区は麗江古城と比べると観光開発の規模も小さく人口も少ないため，その事例を麗江にあてはめて同じように行動することは難しいと考えられる．しかし，どちらも人が住む地域が世界遺産に登録され，そこに住んできた人々が世界遺産に登録された文化を造

り継承してきた事例であることから，基本的な考え方は通じるものがあると筆者は考えている．

また今回の麗江古城における調査のなかで，以前に麗江古城内に住んでいて現在は新市街に移住している納西族の中にも，新市街に住みながら麗江古城内で働いている人がいるということを直接確認することができた．今後は論文中で述べた麗江古城内で働いている納西族の人々への聞き取り調査を進めて調査事例を増やしていくとともに，新市街区に住んでいる納西族の人々を対象に調査を行い，彼らを含めた新しい形での麗江古城のコミュニティの形成の可能性を模索する研究を進めていきたいと考えている．

注

（1） 社団法人日本ユネスコ協会連盟　http: //www.unesco.jp/contents/isan/about.html（参照日 2010. 7. 30）

（2） 山村高淑他編，2007,『世界遺産と地域振興 ── 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社 p. 4

（3） シンクタンクせとうち総合研究機構「世界遺産学のすゝめ」http: //www.wheritage.net/sekaiisangaku.html（参照日 2010. 7. 30）

（4） 山村高淑他編，2007,『世界遺産と地域振興 ── 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社 pp. 2-15

（5） 同上 pp. 18-39

（6） 藤木庸介編，2010,『生きている文化遺産と観光住民によるリビングヘリテージの継承』学芸出版社 pp. 208-227

（7） 才津祐美子，2003,「世界遺産『白川郷』の『記憶』」岩本通弥編『現代民俗誌の地平 3 ── 記憶』朝倉書店 pp. 204-227

（8） 才津祐美子，2007,「世界遺産という冠の代価と住民の葛藤」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館 pp. 105-128

（9）（iv）人類の歴史上重要な時代を例証する，ある形式の建造物，建築物群，技術の集積，または景観の顕著な例．（v）特に，回復困難な変化の影響下で損傷されやすい状況にある場合における，ある文化（または，複数の文化）を代表する伝統的集落，または，土地利用の顕著な例．

(10) 例えば萩町地区では世界遺産登録前は年間約 70 万人だったのが 2005 年には約 144 万人と倍増した．

(11) 才津祐美子，2007,「世界遺産という冠の代価と住民の葛藤」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館 p. 110

(12) 才津祐美子，2007,「世界遺産という冠の代価と住民の葛藤」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館 p. 122

(13) 同上 p. 125

(14) 合田昭二・有本信明編，2004,『白川郷 ── 世界遺産の持続的保全への道』ナカニシヤ出版 p. 28

(15) 平村相倉伝統的建造物群保存地区保存計画（1994 年 8 月 10 日平村委員会告示第 2 号）

(16) 写真提供　岐阜県白川村役場　http: //www.shirakawa-go.org/lifeinfo/info/kankou/main. htm（参照日 2010.7.30）

(17) 世界遺産麗江古城は厳密には大研古城，束河古鎮，白沙古鎮の 3 つの歴史地区が登録されているが，一般的に麗江古城と言えば大研古城のことを指すことから，本論でも麗江古城とは大研古城を指すものとする．

(18)（ii）ある期間を通じて，または，ある文化圏において，建築，技術，記念碑的芸術，町並み計画，景観デザインの発展に関し，人類の価値の重要な交流を示すもの．（iv）人類の歴史上重要な時代を例証する，ある形式の建造物，建築物群，技術の集積，または景観の顕著な例．（v）特に，回復困難な変化の影響下で損傷されやすい状況にある場合における，ある文化（または，複数の文化）を代表する伝統的集落，または，土地利用の顕著な例．

(19)　例えば1995年から2000年の5年間で，観光客が年間約70万人から約260万人に，観光収入は約1.6億元から約15億元へと大幅に増加している．このことからもわかるように，世界遺産登録によって麗江古城の観光地としての知名度が上がったことで急速に経済が発展している．

(20)　山村高淑他編，2007,『世界遺産と地域振興 ── 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社 pp. 33-36

(21)　山村高淑他編，2007,『世界遺産と地域振興 ── 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社 pp. 31-32

(22)　藤木庸介編，2010,『生きている文化遺産と観光住民によるリビングヘリテージの継承』学芸出版社 p. 220

(23)　山村高淑他編，2007,『世界遺産と地域振興 ── 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社 p. 72

(24)　藤木庸介編，2010,『生きている文化遺産と観光住民によるリビングヘリテージの継承』学芸出版社 pp. 218-219

(25)　山村高淑他編，2007,『世界遺産と地域振興 ── 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社 pp. 33-38

参考文献

合田昭二・有本信明編，2004,『白川郷 ── 世界遺産の持続的保全への道』ナカニシヤ出版

愛知大学国際コミュニケーション学部，2003,『麗江古城のナシ族：生活と文化 ── 2002年度中国フィールドワーク報告書 ──』愛知大学

愛知大学国際コミュニケーション学部，2004,『麗江古城のナシ族：生活と文化（Ⅱ）── 2003年度中国フィールドワーク報告書 ──』愛知大学

五十嵐敬喜他編，2007,『私たちの世界遺産① ── 持続可能な美しい地域づくり』公人の友社

石森秀三・西山徳明編，2001,『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』国立民族学博物館調査報告 21

垣内恵美子，2005,『文化的景観を評価する　世界遺産富山県五箇山合掌造り集落の事例』水曜社

才津祐美子，2003,「世界遺産『白川郷』の『記憶』」岩本通弥編『現代民俗誌の地平 3 ── 記憶』朝倉書店

才津祐美子，2007,「世界遺産という冠の代価と住民の葛藤」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館

佐野賢治編，1999,『西南中国納西族・彝族の民俗文化』勉誠出版

世界遺産研究センター編，1998,『世界遺産 Q & A ── 世界遺産化への道しるべ ──』シンクタンクせとうち総合研究機構

高倉健一，2006,「空間文化による民族研究 ── 麗江古城のナシ族を事例に ──」（愛知大学国際コミュニケーション学会『国際コミュニケーション学会　学会賞・努力賞受賞卒業研究集成』愛知大学　所収

西山徳明編，2004,『文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』国立民族学博物館調査報告 51

西山徳明編，2006,『文化遺産マネジメントとツーリズムの持続可能な関係構築に関する研究』国立民族学博物館調査報告 61

藤木庸介編，2010,『生きている文化遺産と観光住民によるリビングヘリテージの継承』学芸出版社

宮澤智士，2005,『白川郷合掌造り Q & A』智書房

山村高淑他編，2007,『世界遺産と地域振興 ── 中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社

毛利和雄，2008,『世界遺産と地域再生 ── 問われるまちづくり』神泉社

郭大烈編，1999,『納西族文化大観』云南民族出版社

郭大烈，2008，郭大烈,『纳西学论集』集民族出版社

世界文化遗产丽江古城保护管理局・昆明本土建筑设计研究所编，2006,『丽江古城传统民居保护维修手册』云南科技出版社